

平成17年度病虫害発生予報第3号

平成17年5月12日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要

区 分	農作物名	病 害 虫 名	発生時期	予想発生量
普通作物	イ ネ	いもち病	平 年 並	やや多い
		縞葉枯病（ヒメトビウンカ）	平 年 並	少 ない
		ニカメイガ	平 年 並	やや少ない
		イネミズゾウムシ	やや早い	少 ない
果 樹	ナ シ	黒 斑 病	平 年 並	やや少ない
		黒 星 病	平 年 並	少 ない
		ハダニ類	平 年 並	平 年 並
		アブラムシ類	平 年 並	平 年 並
リンゴ	カメムシ類	斑点落葉病	平 年 並	やや多い
		ハダニ類	平 年 並	平 年 並
野 菜	スイカ	菌 核 病	平 年 並	やや少ない
		つる枯病	平 年 並	平 年 並
		うどんこ病	平 年 並	やや少ない
	スイカ・メロン	ハダニ類	アブラムシ類	平 年 並
ハダニ類			平 年 並	平 年 並
シ バ	葉 腐 病（ラージパッチ）	やや遅い	平 年 並	

[参考]

気象予報（抜粋）

1か月予報（5月7日～6月6日：5月6日、広島地方気象台発表）

向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

< 可能性の大きな気温経過 >

期 間	平均気温
5月7日～5月13日	低 い
5月14日～5月20日	平年並が高い
5月21日～6月3日	平 年 並

普通作物

【イネ】

1 いもち病（葉いもち）

（1）予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	平年並
発生量	やや多い

（2）予報の根拠

ア 昨年の穂いもちの発生は平年より多く、種子の保菌率は高いと見込まれる。

イ 5月6日現在、苗いもちの発生は認められていない。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並が多いと予想されており、苗いもちの発生にやや助長的である。

エ 効果の高い育苗箱施薬剤が普及している。

（3）防除上注意すべき事項

ア 種子消毒を徹底するとともに、種もみが露出しないように覆土をていねいに行う。

イ 苗におけるいもち病は急激に蔓延するため、発生がみられた場合は直ちに葉いもち防除粉剤または液剤を散布し、その後は病勢に応じて追加防除を行う。

ウ 育苗箱施薬を行う場合は、使用時期及び使用量を守って1箱ずつていねいに粒剤を散布する。

エ 補植用苗が本田での発生源となることが多いので、補植が終わったら放置せず、直ちに裏返してほ場に埋める等の処分を徹底する。

オ 山間部等のいもち病の常発地において長期効果持続型の育苗箱施用剤を使用する場合は十分な効果が得られない場合があるので、ほ場の見回り等を行い早期発見に努める。

カ 県東中部ではカルプロパミド剤（ウィンアドマイヤー箱粒剤など）、ジクロシメット剤（デラウスプリンス粒剤など）の耐性菌が発生していることから、育苗箱施用剤にはDr.オリゼプリンス粒剤10、デジタルコラトップアクタラ箱粒剤、ブイゲットプリンス粒剤10、ビルダープリンスグレータム粒剤などを使用する。

2 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

（1）予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	平年並
発生量	少ない

（2）予報の根拠

ア 昨年の本病の発生量は平年より少なかった。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並と予想されており、ヒメトビウンカの発育は平年並に推移するものと見込まれる。

（3）防除上注意すべき事項

県東部等の常発地では、イミダクロプリド剤、フィプロニル剤などのヒメトビウンカに効果の高い育苗箱施用剤を使用する。

3 ニカメイガ

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	平年並
発生量	やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 5月6日現在、予察灯及びフェロモントラップへの誘殺は確認されていない。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並と予想されており、ニカメイガの発育は平年並に推移するものと見込まれる。

ウ 昨年の第2世代幼虫による被害は平年よりやや少なかったため、越冬量もやや少ないと見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

近年、局地的ではあるが発生が増加している地域がみられているので注意する。常発地では、ニカメイガに対して効果の高い育苗箱施用剤を選択する。

4 イネミズゾウムシ

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	やや早い
発生量	少ない

(2) 予報の根拠

ア 予察灯への初飛来は、平年よりやや早い4月30日に岩美町（平年5月7日）、倉吉市（平年5月1日）で確認された。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並と予想されている。

ウ 5月9日現在、4月下旬移植ほ場（県東部）の平均寄生虫数は0頭/株（畦畔沿い3列目まで）と少ない発生である。

エ 昨年の新成虫の誘殺数は平年と比較してやや少なかった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 越冬成虫の飛来最盛半旬は平年よりやや早い5月第4～5半旬頃になると予想される。

イ 育苗箱施薬の防除効果が高いので、使用時期及び使用量を守って1箱ずついいいに粒剤を散布する。

ウ 育苗箱施薬を行っていても本田での食害が急増する場合には、追加防除を行う。

エ 直播栽培などの育苗箱施薬ができない水田においては、成虫及び被害の発生量（成虫密度が0.5頭/株以上、又は被害葉が顕著に増加してきた時期）をみながら、本田初期に防除を行う。

果 樹

【ナ シ】

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並
発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 発生予察ほ場における開花期以降の胞子飛散数は平年をやや下回っている。また、5月6日に行った県内15園の巡回調査による幼果のポリ袋検定による発病果率は0.3%（平年5.0%）と平年を下回った。

イ 本年のナシ園における病芽及び枝病斑などの越冬菌密度は平年に比べて低くなっている。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 今後、気温の上昇とともに胞子飛散数の増加が予想されるため、出来るだけ早く小袋掛け作業を終了する。特に、降雨直後は胞子飛散数が増加するため、薬剤防除を徹底する。

イ 薬剤は、小袋掛け直前にユニックス顆粒水和剤47の1,500倍液、有機銅フロアブル1,000倍とポリオキシソルボン水和剤1,500倍の混用液、ポリペリン水和剤1,500倍液など、小袋掛け終了後にはジアリン水和剤600倍液などを散布する。

ウ スピードスプレーヤによる防除地域では往復または縦横走行を行い、手散布地域では散布むらのないよう丁寧に薬剤散布を行う。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並
発生量 少 ない

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地ほ場での発病はほとんど認められていない。

イ 開花期以降、高温少雨傾向で推移したため、越冬伝染源上からの子嚢胞子及び分生子の飛散数は平年を下回った。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病した幼果や葉は取り除き、園外に持ち出すか土中に埋める。

イ 薬剤はサニパー600倍液、ユニックス顆粒水和剤47の2,000倍液、ジラム・チウラムフロアブル（ダイボルト又はパルノックス）500倍液、有機銅フロアブル1,000倍液、ベルコートフロアブル1,500倍液などを散布する。

3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア クワオオハダニの越冬卵のふ化初日は、平年並の4月19日(平年4月20日)に認められた。

イ 5月上旬現在、県予察ほ場におけるハダニ類寄生葉率は0%(平年:0%)で、平年並の発生となっている。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

クワオオハダニの発生が多い園では、ダニトロンフロアブル1,500倍液などを散布する。

4 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月第1半旬現在、県予察ほ場におけるワタアブラムシの寄生新梢率は8.8%(平年:9.0%)で、発生時期、発生量ともに平年並となっている。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア アブラムシ類の発生が多く認められるナシ園では、アドマイヤーフロアブル5,000倍液などを散布する。

イ アドマイヤーの使用に当たっては、連用による薬剤抵抗性の発達を避けるため、年1回の使用とする。

5 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 予察灯における初誘殺は平年並の4月下旬~5月上旬に認められた。

イ 5月上旬現在、予察灯の誘殺数はチャバネアオカメムシ、クサギカメムシともに調査点により平年並~やや少ない発生量となっている。

ウ 県東部に設置した集合フェロモントラップによる5月上旬のチャバネアオカメムシ誘殺数は24頭(平年:12.2頭)と平年よりやや多い。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 一部のナシ園では、5月上旬頃からカメムシ類の被害が認められている。

イ カメムシ類の発生や果実被害が認められる園では、直ちにジノテフラン水溶剤(アルバリンまたはスタークル顆粒水溶剤)2,000倍液などを散布する。

[リンゴ]

1 斑点落葉病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 昨年の本病の発生量はやや多かったため、越冬菌密度が高くなっている。

イ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並が多いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤の散布間隔は10日程度とし、かけむらのないように丁寧に散布する。

イ 薬剤は摘果期にマンゼブ水和剤（ペンコゼブ水和剤又はジマンダイセン水和剤）

600倍液など、袋掛け前にはアントラコール顆粒水和剤500倍液など、袋掛け中にはジラム・チウラムフロアブル（ダイボルト又はパルノックス）500倍液などを散布する。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場における5月上旬のハダニ寄生葉率は0%（平年：0%）である。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ハダニによる葉の寄生が認められた園では、ニッソラン水和剤2,000倍液などを散布する。

野菜

[スイカ]

1 菌核病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、本病の発生は平年に比べてやや少ない。

イ 本病はやや低温（15～20）で、降雨が続くと発生が多くなるが、気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並で、降水量は平年並が多いと予想されており、引き続きやや少ない発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスやトンネル内が過湿にならないように換気を行う。咲き終わった花卉は早く摘み取って除去する。

イ 薬剤は、ベルコート水和剤1,000倍液、スミブレンド水和剤2,000倍液、ロブラール水和剤1,000倍液などを散布する。

ウ ハウスではスミレックスくん煙顆粒またはロブラールくん煙剤などを使用してもよい。

2 つる枯病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月の降水量が少なく推移したため、5月上旬現在、本病の発生はやや少ない。

イ 本病は降雨や過湿によって発病が増加するが、気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並が多いと予想されており、平年並の発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスやトンネル内が過湿にならないよう、換気を行う。

イ 本病は、株元から発病するので、薬剤散布は株元にも薬液が付着するように丁寧に行う。

ウ 本病は、雨滴のあたる箇所からも発病するので、トンネル栽培のスイカの茎葉には雨がなるべくあたらないようにトンネル開閉を行う。

エ 薬剤は、マンゼブ水和剤（ペンコゼブ水和剤又はジマンダイセン水和剤）600倍液、アントラコール顆粒水和剤600倍液、ダコニール1000の1,000倍液などを散布する。

3 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、本病の発生は見られていない。

イ 本病は、25 前後の気温と適度な湿度で発病が増加する。気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並で、降水量は平年並が多いと予想されており、やや少ない発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病は、収穫期の草勢低下により発生が多くなるので、初期防除を徹底する。

イ 発生前には、ポリベリン水和剤1,000倍液、ベルコート水和剤1,000倍液などを散布する。

ウ すでに発病のみられるほ場では、トリフミン水和剤5,000倍液などを散布する。

[スイカ、メロン]

1 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（東伯郡大栄町）における黄色水盤への有翅アブラムシ類の初飛来時期は平年並の4月15日であり、5月上旬までの飛来量は平年並である。

イ 5月上旬現在、ハウスおよびトンネル栽培スイカにおけるワタアブラムシの発生量は、平年並である。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並で、降水量は平年並が多いと予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- アハウスの換気部分や出入口には寒冷紗被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。
- イスイカのハウス栽培では、着果後にはDDVP乳剤50の1,000倍液、その後の果実肥大期にはアマイヤー水和剤2,000倍液を散布する。トンネル栽培ではつる引き誘引時期に、チェス水和剤3,000倍液、交配前にバリアード顆粒水和剤4,000倍液等を散布する。着果後はDDVP乳剤50の1,000倍液、アマイヤー水和剤2,000等を散布する。メロンではチェス水和剤3,000倍液、DDVP乳剤50の1,000倍液、モスピラン水溶剤8,000倍液等を散布する。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア4月の気温が平年並であったことから、ハダニ類の畦畔部からの移動時期も平年並とみられる。
- イ5月上旬現在、ハウス栽培スイカにおける発生量は平年並となっている。
- ウ気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並で、降水量は平年並か多いと予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

すでに発生がみられる場合、薬剤の使用基準にしたがい、スイカ、メロンともに発生初期にニッソランV乳剤1,000倍液、バロックフロアブル2,000倍液等を散布する。発生がやや多くなった場合はオサダンフロアブル2,000倍液、コロマイト乳剤1,000倍液などを散布する。ただし、ミツバチ交配を行う前には、ニッソランV乳剤の使用は避ける。

[シバ]

1 葉腐病(ラージパッチ)

(1) 予報の内容

発生時期	やや遅い
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア4月の降水量が少なく推移したため、5月上旬現在、生産芝で本病の発生はほとんどみられない。
- イ本病は降雨によって発病が増加するが、気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

本病春期の発生に対しては、発病前のセレンターフ顆粒水和剤等の散布を基本とするが、すでに、パッチがみられる場合は、発病部位を中心にグランサー水和剤500倍液0.5L/m²、バリダシン液剤5の500倍液0.5~1L/m²などをスポット散布する。

[おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。
詳しい内容は、独立行政法人 農薬検査所の「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.acis.go.jp/>)

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守しましょう。

< 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫の発生予察情報、現地巡回調査結果やフェロモントラップ調査結果（ネキリムシ類、果樹カメムシ類）などの指導情報、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL：0857-53-1345、FAX：0857-53-5647

E-mail：byogaichu@pref.tottori.jp 又は kttr0301@sp.jppn.ne.jp

今回の予報発表は、6月2日（木）の予定です。